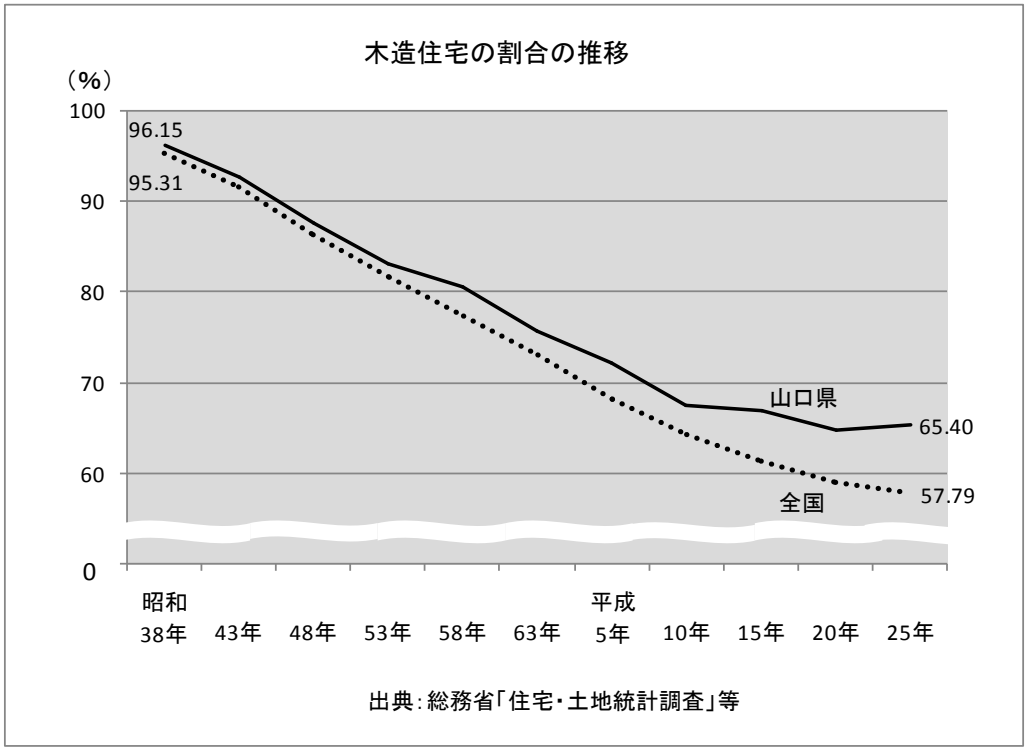
知っちょる？　統計やまぐち

39　見直される木の家　　２６年１１月２０日掲載

童話「３匹のこぶた」では、木の家は簡単に作ることはできるものの、オオカミに吹き飛ばされてしまうもろくて弱いものとして描かれています。れんが造りや石造りの家が多いヨーロッパの風土に根ざしたお話といえるでしょう。

さて、国土の７割を森林が占め、現存する世界最古の木造建築物である法隆寺を有するわが国では、夏涼しく冬暖かい断熱性、優れた通気性など、高温多湿な環境に適していることから、木造住宅には古くから根強いニーズがあります。

しかし、全国の住宅総数に占める木造住宅の割合は、昭和３８年の９５．３％から、マンションなどの増加に伴い減少し続け、先日公表された「平成２５年住宅・土地統計調査」の速報結果では５７．８％と過去最低となっています。都道府県別では、寒さが厳しい東北地方の各県などが上位を占め、山口県は６５．４％で３３位でした。

このように減少を続けてきた木造住宅の割合ですが、７割の都道府県で依然として減少する中、今回の調査で本県は初めてプラスに転じ、５年間で０．７ポイント増加するという大きな変化がありました。本県以外でも、滋賀、徳島など、１２の県でプラスに転じており、本県の増加率は５位となっています。これは近年、やさしい木のぬくもりが見直されていることのあらわれなのかもしれません。

県では、優良県産木材を利用した新築住宅への助成制度も設け、その普及を図っています。やまぐちの木造住宅の今後が注目されます。